

監修を終えて

大平総理のご逝去から、早くも二年の歳月が流れようとしている。

流れ去ったこの二年の歳月は、短くもあり、長くもあつた。記憶のなかに蘇える総理の面影は、なお昨日の如くに鮮明でありながら、時計の歯車は大平総理亡きままに確実に時を刻み続けている。

『大平正芳回想録』第一巻伝記編の監修をお引受けするとき、私たちには少なからぬ懸念と逡巡があつた。

それは、第一に、現職総理として斃れた一人の政治家の伝記を作成するには、まだあまりにも時期が早過ぎるのではないか、という点であり、第二に、私たちがよくこの重責を果たし得るか、ということであつた。

大平総理の愛用された言葉の一つに、「山上在山 山幾層」というのがある。だが、幾層にも重なり、連なる山の全容は、それを現に越えつつある時代の人間にはなかなか判らないものである。山の姿は、それを乗り越え、遙か後方に振り返って見たときに、ようやく認識できるものとなる。そのときはじめて、時代の旅人たちは、山のなかの小径がどこを通過していたのか、どこで、なぜに道に迷つたのか、断崖絶壁や急流がどこにあり、雪崩や落石、不幸な争いがなぜに生じたのか、といったことを、山の全体像のなかに冷静に位置づけ得るよつになる。

歴史上の諸事件や人物に関する客観的な記述が可能となるには、いくらかの時の流れが必要だと言われるのはこのためである。時の流れは、事件や人物を時間の篩にかけることによって、それを適当な大きさと配置に整理する。時の流れはまた、公式の国家間関係から私的な人間関係に至るさまざまな事情のゆえに、現在なお公表し得ない数々の歴史的事実の封印を解き、これを徐々に明らかにしていくという旨みを持つ。

だが、他方で、時の流れは貴重な記録の散逸、消滅、風化や、記憶の喪失をもたらす。とりわけ、当事者の記憶の中のみ存在し、当事者が健在である間にしか入手できない重要な証言などは、永久に語られることなく、歴史の暗箱のなかに収められてしまいかも知れない。

私たちのあとに続く世代や後世の歴史家が、この時代の真相を正確に理解し、そこから歴史の教訓を引き出すことができるようにするためにも、時の流れとともに散逸していく貴重な歴史的事実の組織的収集、保全、整理、解析に努めることは、同時代人の責務であろう。

こうして、大平総理のご親族、大平総理の七十年の生涯の各時期に総理と親交を結ばれた、政界、官界、産業界、学界、言論界等各界のご友人、郷里香川県の各界の方々のご協力を得て、膨大な資料が収集され、インタビュ어가くりかえされ、海外をも含む現地調査等が行われた。資料の収集、解析、伝記の構成、執筆、推敲、校正等のために開かれた会議は数え切れないほどである。

この伝記の作成に際し、私たちは次のような基本方針をもって監修に臨んだ。

- 一、時間の制限のなかで可能な限り、大平総理の思想、行動、人柄などに関する情報を、いかなる立場からのものであれ、細大もらさず収集することに努める。
- 二、収集された情報はその信頼度を慎重に吟味し、客観性のある正確な記述に努める。矛盾する情報が存在し、事実の確定が困難な場合、なるべくそれらを多面的に生かして記録にとどめるよう努め、軽々に異なる情報の一方を切り捨てるようなことは避ける。
- 三、私情を排し、主観的価値判断や性急な断定を慎み、政治的、人間的対立、葛藤についても、対立するそれぞれの立場、主張、感情、背景等を理解するための素材の提供に努め、判断と評価を読者に委ねる態度を堅持する。
- 四、人間大平正芳の微妙な感情の動きを含めて内面の精神史を重視すると同時に、その七十年の生涯を通じて織りなさ

れた多様多彩な人間関係のドラマを描くよう努める。

五、大平正芳の生涯を描くことを通じて、その時代の政治的、経済的、社会的、文化的背景を明らかにし、特に、戦後政治史の解明に寄与する素材を提供するよう努める。

この基本方針に基づき、私たちとしては精一杯の努力をしたつもりではあるが、能力と時間の絶対的制約のゆえに、なお収集し切れなかった情報、提供していただいたにもかかわらず十分に活かし切れなかった情報などが少なからず存在する。また、私たちとしては性急な価値判断や断定を慎んだつもりではあるが、思わぬ間違い、公正さや配慮を欠いた表現も少なくないであろう。これらの点については、関係者のご海容をお願いするとともに、是非率直なご批判、ご指摘を賜わり、将来なんらかの形で改めていきたいと念じている。

なお、大平総理が現職総理として斃られたということと、以後わずか二年しか経過していないという事情のためもあって、私たちが知り得た情報のなかにも、現段階ではなお公表のはばかられるものがあつたことも事実である。これらについては公開が可能となつた段階で補充する必要があることは言うまでもない。また、この伝記作成のために収集された膨大な情報は、いづれ分類、整理の上、広く一般に利用できるようにしたいと考えている。

最後に、情報収集、原稿執筆等、この伝記作成のために、文字通り寝食を忘れて献身的な努力をしていただいた編集委員各位、特に、各時代の分担執筆を担当された阿部穆、福州伸次、安田正治の各氏、分担執筆に加えて、伝記全体を通じての総合調整、文体の統一等に当たられた福島正光氏、伝記作成作業全体の事務処理に裏方として大変なご苦勞をされた小国宏、齋藤英夫の両氏をはじめ事務局スタッフ各位に、この場を借りて心から御礼申し上げます。これらの方々のご尽力がなかったならば、本書が大平総理の三回忌までにこのような形ででき上がることは、とつていありえなかつたであろう。

私たち三人の監修者は、不思議な運命の糸に導かれて、異なる時期、異なる縁で、それぞれに、人間大平正芳との出逢いの機会を持つこととなった。

それ以来、生涯の最後の時期に至るまで、私たちは親子ほども年齢の違う大平総理と、無遠慮と思われるほどにまで自由で、のびのびとした、豊かで温かい、人間的なまじわりを結ばせていただき、このすぐれた人生の先輩から多くの貴重なことを学ばせていただいた。

大平総理との雑談のなかで何度か話題にのぼった書物のひとつに、『為政三部書』というのがある。そのなかに、為政者の心すべきこととして、「一、修身（身を修めること）、二、用賢（賢者を用いること）、三、重民（民を重んずること）、四、遠慮（先々に心すること）、五、調變（とこのえやわらけること）、六、任怨（怨を受けて恐れぬこと）、七、分謗（同僚の謗を我も分つこと）、八、應變（変に應ずること）、九、獻納（忠言をたてまつること）、十、退休（いつやめるか）」という十カ条の「廟堂忠告」という文章がある。大平総理の生き方は、この十カ条を規矩とし、これを地で行った感があった。

今、私たちの手許には一通の手書きのメモが残されている。その日付は、大平総理が息を引き取られた「昭和五十五年六月十二日」となっている。このメモは、病床の総理に、病院の外の「空気」をお伝えし、若干の進言をすべく、私たち三人の手で、前日の深夜、慌ただしく起草されたものであった。それは遂に大平総理の目に触れることもなく、虚しくその日付で時間を止めたままである。

昭和五十七年五月

公文 俊平

香山 健一

佐藤誠三郎